

提出日 平成 25 年 3 月 31 日

平成 24 年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 (該当に○)

海外共同・共同研究・個人研究・出版助成

研究代表者 (所属・職名・氏名) 文芸学部・専任講師・奥彩子

研究課題名

文学とテクノロジー：語りの媒介としてのテープレコーダー

研究分担者 (共同研究者)

研究期間 平成 24 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日

研究を実施することになった経緯 (海外共同の場合のみ記入)

研究組織 [ 氏名, 所属, 役割分担 ]

研究発表 (印刷中も含む) 雑誌及び図書

なし

## 研究実績の概要

本研究は、大江健三郎の『取り替え子』(2000)と旧ユーゴスラヴィアのユダヤ系作家ダヴィド・アルバハリの『餌』(1996)を中心に、現代文学におけるテープレコーダーの役割に着目し、ナラティヴの変容を明らかにすることを目的としている。本年度は、そのうち、アルバハリの『餌』を一部取り扱った論文「記憶の変奏—ユーゴスラヴィア解体と文学的ディアスポラ」(塩川伸明、小松久男、沼野充義編『ユーラシア世界2 ディアスポラ論』、東京大学出版会、2012)を刊行した。この論文では、テープレコーダーの役割について踏み込むことはできていないものの、大江健三郎の『取り替え子』との相似についても言及しており、本研究の先触れとなる序章と位置づけられる。さらに、本年度は、資料収集を中心におこなうとともに、理論的枠組みの策定に注力した。資料については今年度の予算内では十分に集めることができなかったため、来年度にさらに充実させるようにしたい。理論的枠組みとしては、世界文学をめぐる議論を踏まえるなかで、「同時多発の文学」という新しいアイデアを来年度には、この枠組みをもちいて、大江とアルバハリについて論じ、成果発表を行いたい。